第五部　結び

本書は、日本帝国主義が傀儡政権をつくり、形の上で独立国を装った「満洲国」において、「満人」文壇を代表する作家として活躍した古丁について、その作品と思想の内実を周辺の事情と共に明らかにすることを目指したものである。同時に、古丁に限らず、当時の「満洲国」で困難な現実に直面した漢民族知識層の姿を明らかにし、中国近代文学史において未だ空白のままに残されている一角に新しい光を当てることに寄与するものである。そのため、関連する出版文化の概要を各地の図書館で調査し、また実地踏査により、都市と農村の生活の変化についての認識を深め、また存命の関係者にインタビューしながら考察を進めた。これまで、古丁を日本の協力者と見なすか、それとも「愛国」の精神を貫いたと見るか、という二つの評価で争われてきたが、それは、ごく一部の限られた資料から判断しようとするものであった。そして、その問題は、結局、古丁の態度を「満洲国」体制側に対する「面従腹背」とするかどうかに絞られるものであった。

第五部では、第一部「古丁の生涯」、第二部「翻訳活動」、第三部「創作活動」、第四部「編集出版活動」それぞれの考察を総合し、結論をまとめたい。まず古丁の思想的変遷を、大きく北平革命時代と「満洲国」時代とに分け、後者を『明明』期、事務会『藝文志』期、芸文書房期の三つの段階に分ける。そして、一．北平時代、二．『明明』時代、三．事務会『藝文志』時代、四．芸文書房時代とし、時代ごとに整理する。最後に、五．今後の課題と展望を加え、巻末に、筆者が新たに掘り起こして確認した資料の一覧と、古丁の年譜を付す。なお、第五部では名前を「古丁」に統一する。

一．北平時代

長春のそれなりに裕福な家庭に生まれ育った古丁は、満鉄がその附属地で経営した公学堂、南満洲中学堂で早くから日本語教育を受け、石川啄木の短歌や夏目漱石の小説を翻訳したいという希望を抱く文学青年に育っていく。ところが、関東軍が起こした満洲事変が彼の運命を変えることになる。

古丁は北平（北京）に逃れ、一九三二年に北京大学に再入学する。「革命救国」の叫びが渦巻き、世界大恐慌のただ中で共産主義革命運動が盛んになった時期に、若き古丁は中国左翼作家聯盟北方部の組織部長となる。日本語の能力が認められた結果であった。

三三年、古丁は、日本のプロレタリア文学作品や文芸理論を翻訳し、またプロレタリア詩などの創作にも活躍。中国共産党が主導するストライキへの支援と中国のプロレタリア文学理論構築のために働いた。

彼が翻訳した作品には、在日朝鮮人作家、朴能の小説「味方―

民族主義を蹴る」、「文芸戦線」派の岩藤雪夫の小説「紙幣乾燥室の女工」、日本共産党の指導者、古川荘一郎（蔵原惟人）の論文「芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争―忽卒な覚え書」等がある。朴能の小説を翻訳したのは、無産階級の民族を超えた連帯を訴えるためであり、岩藤雪夫の小説の翻訳は中国共産党がリードした労働者のストライキを支援するため、蔵原論文の翻訳は中国の左翼文芸理論構築のためであった。この時期の翻訳方法は基本的に直訳で、論文の翻訳は生硬だが、それは原文そのものの調子によるところも大きかった。小説には、中国の現実に合わせて中国風にアレンジするなどの工夫も見られる。言葉遣いは労働者の口語に近い語彙が選ばれている。

厳密には思想的立場が異なるものの、当時の日本の左翼思想とその表現方法を吸収しながら、古丁は「貴重な経験―天津恒源紗廠女工の闘い」（宝貴的経験―天津恒源紗廠工人的闘争）等の散文詩も書いている。言葉遣いはやはり労働者の口語に近く、わかりやすいものであった。ただし、学生時代の古丁は、日本の労働運動が過酷な弾圧にさらされていることなどに関する知識に乏しく、ひたすら理想を追い求めて突き進む傾向にあったと言える。警察に逮捕され、重要な会議に特務を連れて来た疑いを受けた古丁は、傷ついた心を抱いて、三三年に郷里に帰る。

二．『明明』時代

古丁を待っていたのは、没落した家族と日本帝国主義の支配する「満洲国」の現実であった。生まれ育った町、長春は、名を新京と変え、満鉄の誇る高速特急亜細亜号が停車する「満洲国」の首都となり、「王道楽土」を夢見る人々が闊歩していた。反満、反日、共産主義思想を持つ人びとは激しい弾圧を受け、新文化運動の中で、魯迅が「人を食う」と言った「礼教」が復活していた。古丁にとって頼れるのは日本語の能力だけで、生活のためにようやく下級官吏の職を得、結婚もする。だが、心が晴れることはなかった。

やがて、北平や上海で革命運動に参加した後に挫折して故郷に戻った、境遇を同じくする仲間たちと「芸術研究会」を結成し、文学談義と酒に憂さを晴らす生活がしばらく続く。

三七年二月、小説「光のない世界」（没亮世界、後「莫里」に改題）を、当時奉天（瀋陽）で刊行されていた『新青年』第四七・四八合併号に発表する。「私」は、かつて北京で革命思想を教えてくれた莫里と五年ぶりに新京で再会する。だが、彼は今や警察官となり、アヘンを吸引し、梅毒患者に成り果てていた、という物語である。他にも、この時期の古丁は、中国の近代文学には珍し

く、左翼運動に挫折して「満洲国」に戻る知識人を題材にした小説を書いている。「私」の語り形式のものもあり、日本の同時期の「転向小説」の影響が見られる。

この年、「満洲国」が掲げた「民族協和」のスローガンに内実を与えるために、「満人」向けの大衆娯楽雑誌を発行する計画が支配者側から持ち上がり、古丁と仲間たちは誘いを受ける。それに対して古丁らは、青年知識層向けの雑誌が必要であると主張する。月刊満洲社の社長だった城島舟礼はその提案を受け入れ、三七年三月、「満洲国」唯一の中国語総合雑誌『明明』が創刊される。古丁をはじめ、「芸術研究会」のメンバーは次々に短編小説を発表した。

創刊から半年ほど経ち、実務を担う古丁らが『明明』の実権を握ると、当初の計画通り、文芸雑誌に切り替えられていく。当時、蕭軍・蕭紅等の左翼文学者が弾圧によって活躍の場を奪われる中、「満人」文壇で唯一の文芸雑誌はこのようにして誕生した。

この間、同年七月に中日全面戦争が始まり、九月二日、古丁は『盛京時報』（瀋陽）に徐長吉の本名で「日本対華的真意」を発表している。上からの命令で書いたと思われるような、日本のスローガンを羅列する形式の文章だった。この経験が後に、自らの言葉を書くことができず、そこから何としてでも逃れようとする詩人の苦しみと願望を綴った詩「昼夜―ある詩のない詩人の日記」（晝夜―一個無詩的詩人的日記）を生んだと考えられる（この詩は『奮飛』［一九三八］に収録されている）。

『明明』で古丁らが掲げた方針は、「方向なき方向」「書いて刷る」であった。それは、「満洲国」の支配層の望む方向でも、また「郷土文芸」を主張する山丁らの目指す方向でもなく、満洲に新文学の機運を作り出すための方策であった。『明明』は三七年一一月、日本で『大魯迅全集』が刊行されたのをきっかけに、中国語版の輸入が禁止されている魯迅作品の特集を組む。古丁はその特集の中で、左翼用語を避けながら日本語版の「解題」を翻訳し、魯迅の作風を紹介した。中国社会を批判・風刺し、民衆啓蒙のために闘った魯迅の精神を学ぼうとする姿勢がそこに明らかにされている。

古丁は、礼教の下で育った若い人妻が、愛の冷めた夫の日本滞在中に不倫し、病気に罹って死ぬという、短編小説「皮箱」（三七年三月）や、大家族を舞台に、新旧世代が入り混じり混乱する社会の様子を風刺した「百枚小説」の「原野」（三八年三月）等を、『明明』に発表。また、三八年には城島舟礼の名を冠した「城島文庫」が月刊満洲社から刊行され、その第一冊として古丁の短編小説集『奮飛』が出版されている。

この時期の古丁の作品に見られる思想は、「苦悶」と「闘い」という二つのキーワードで表すことができるだろう。「苦悶」の原因は、一つは革命の失敗であり、もう一つは醜悪で血腥い「封建」

的植民地「満洲国」の社会状況であった。そして、三つ目は盧溝橋事変をきっかけに開始された日中全面戦争である。

一方、「闘い」の方向については、以下の四点にまとめることができる。

①自分との闘い。酒に溺れ、絶望に陥りそうな自分との闘いの中に、常に自己革新を図ろうとする態度が示されている。

②「鴛鴦蝴蝶派」を代表とする旧文芸への反発に加え、新文学を目指す古丁らの考え方をブルジョア個人主義と非難し、「郷土文芸」に関する論争相手でもあった、山丁らとの闘い。

③青年を抑圧する礼教を中心とした、「封建」制への反発。

④農村を荒廃させ、都市に流れ込んだ人びとの荒んだ生活を生み出している、産業五カ年計画などの「満洲国」の政策に対する批判。

三　事務会『藝文志』時代

三八年九月を最後に『明明』が停刊した後、民生部の外局である満日文化協会の後援により、三九年六月に事務会『藝文志』が創刊された。古丁が、長編小説『平沙』、散文詩集『浮沈』等の創作の他、夏目漱石の『こゝろ』などの翻訳で活躍していた時期である。『奮飛』が文芸盛京賞を、『平沙』も民生部大臣文芸賞を受賞して名声を獲得。『原野』を表題作とする「満人作家選集」が日本で刊行されると共に、「満洲国」の代表的作家として訪日もした。

この時期を、「転換」と「漢話」をキーワードにまとめてみたい。「転換」は、次の三点にまとめられる。

①個人的心情の変化。古丁は、暗闇や醜悪の中で苦悶していた青年期から立ち上がり、しっかりと「明日」への信念を持って着実に前へ進む詩人へと成長していく。『奮飛』の刊行以後、古丁は、「哲学」、すなわち作品の主題を失い、しばらく反省期に入る。創作代わりに手がけた夏目漱石『こゝろ』の翻訳では、原作に忠実な訳を徹底し、日本語から語彙や語脈を漢語に持ち込む、いわば漢語の改革を実践している。また、山丁らとの論争を通じて、作家・作品・読者（社会）という三者の関係を見直し、新たな主題を見出していく。まず、長編小説『平沙』（一九三九）において古丁は、冷静に自己観察する自分、苦悶し絶望に陥りそうな自分、独歩しようと決意する自分を、三人の登場人物にそれぞれ托し、それまでの人生を宿命と信じて、しっかり前へ進もうと決意している。『浮沈』にも似たような変化が見られ、これらは後に、『竹林』（一九四三）に収録されることになる「鏡花記」（一九三九）、「盤中記」（一九三九）、「花園」（一九四〇）等の創作につながる。例えば、「鏡花記」には、読んでくれる人などいないと思い込み、自分の心血を注いだ出版直前の詩集を燃やしてしまう主

人公の姿が描かれている。

このような「転換」には、毛沢東「持久戦を論ず」（一九三八年七月）による影響が大きいと推測される。抗日戦争は、必ず中国が勝つ、それまで持ちこたえることが大切だという信念と共に、「満洲国」を切り離すことのない「大中国」の考えに支えられた活動に変わっていったと考えられるからである。

②上記の内面の転換は、外に向けても積極的に発揮された。民生部の外局である満日文化協会の後援を受けるがために時には妥協しながらも、植民地支配に対する批判的小説やエッセイを掲載し、文学のプライドと独立を守ろうとした。

③文学主題の変化。山丁らとの論争を通じて、作家・作品・社会という三者の関係を振り返るなど、しばらく反省と濫読期に入る。そして、自身をモデルにした青年知識人の内面や生活への注視から、「盤中記」「花園」に登場する浮浪児を含む一般市民の生活に関心を向けるようになっていく。

「漢話」については、母語による創作を主張し、注音符号の廃止に反対する論陣を張った点に、「自国語を守る」姿勢が端的に示されている。ただし、それは、句読点の使用、語彙の開拓の提唱、漱石の『こゝろ』等の翻訳に日本語文法や語彙を取り入れる実験など、「漢話」を豊かにする「改革」を伴うものであった。

しかしその後、四〇年一〇月のペスト流行による病院での隔離生活を経て、大きな心境の変化を見せる。それ以前を前期とし、隔離生活から四一年一〇月に芸文書房設立を決意するまでを後期とする。

古丁は、病院での隔離生活を通して、文化レベルの低い民衆を改めて認識し直すことになる。『明明』時代の古丁は、農村を題材とする小説を書いても、民衆の生活実態には迫れなかった。実際に民衆の中に入って暮らした経験がなかったためである。そのことに気づいた古丁は、文学と文化人の役割を見つめ直し、大衆の文化レベルを高めるための翻訳や創作に取り組んでいくことを決意する。

なお、『明明』時代の古丁は、時に権力者との緊張関係も辞さないような反抗的な態度が目立ち、隔離生活の直前あたりから、特高に見張られるようになっていたらしい。病院を出た古丁は、満洲文話会の日本人たちに急に冷遇され、孤立感を抱いたという。また、官庁の組織改革に伴い、満日文化協会との関係が断たれ、芸文志事務会の活動も継続できなくなる。それらが、やがて辞職につながると同時に、芸文書房時代初期の翻訳と創作に結び付いていく。

四一年一月、検閲を含めた文化事業の上級機関が、民生部から国務院弘報処に移管された。戦時体制の情報・宣伝活動の一元化のための措置である。三月には『芸文指導要綱』が発表される。

日本および台湾、朝鮮における総力戦体制のいわば「満洲国」版で、文化組織の一元化を図り、統制色を強める狙いがあった。古丁は、それまでのやり方では志す文学の道には進むことができないと考え、仲間とも相談し、出版社兼書店の経営を決意する。

四．芸文書房時代

この時期は、芸文書房の経営の内実と、日本対米英戦争下における「満洲国」政府の政策に対応しながら、古丁らがいかなる言論活動を行ったかが焦点となる。特に、「聖戦」協力への姿勢が、日本優位の時期と、敗色が濃くなってからでは、どのように変化したかが注目される。

四一年一〇月、「背水」の陣で仲間たちと株式会社芸文書房を創設し、計算が苦手で営利に疎かった古丁が社長に就任する。印刷技術の制約と配給制度による紙不足という悪条件の下、民度を向上させ、国民の読書生活を豊かにするために、面白く、しかも知識の普及や生活に役立つ書物を厳選して販売し、さらに中国の古典や地元作家の作品集などを出版した。芸文書房は、営利目的で大衆の低俗趣味に迎合したり、上海などで刊行された本を翻刻したりすることは決してなかった。

芸文書房設立と同時に、翻訳アンソロジー『訳叢』が出版され、古丁訳としては、ガルシン作「アッタレーア・プリンケプス」（阿忒萊・蒲靈蒲）と「夢がたり」（夢談）、モーパッサン「給仕、もう一杯」（堂倌再來一杯）を収録。前年一一月にはボードレール「若き文学者たちへの忠告」（對於青年文學者的忠告）、四二年一月にはアラン「若き英雄トルディ」を訳出しているが、すべて日本語訳からの重訳であった。訪満する文化人との交流や、四〇年二月に政府派遣で日本を訪れた際の交流などを通して、西欧文芸への視野が開けた結果と推測される。また、漢語文学を豊かにするための方策の一環だったとも考えられる。

日本対米英戦が開始されてしばらく、太平洋や東南アジアの戦闘で日本が優位に立っていた時期の古丁の翻訳書には、四一年一二月に刊行された中島健蔵著『学窓と社会』（芸文書房）がある。若者に向けて、正しい社会状況の認識と適切な行動を促す目的のものと思われる。

古丁は、英雄と呼ばれる人物が柔軟で折れない意志を持つことに影響を受け、歴史小説「竹林」（『麒麟』、一九四二年六月）では、竹林賢人の故事を借りて強権下の知識人の苦悶を表し、戦時中の「満洲国」においていかに生きるべきかを考えた。四二年一月から『新満洲』で連載を始めた、アラン著「若き英雄トルディ」も青年向けと思われるが、若き英雄の紹介を通して、「味を失った塩」となってしまった満洲「原野」の中から民族を助ける力強い

英雄の誕生を期待していたと思われる。他に、『米英東亜侵略史』（一九四二年四月）を翻訳し、日本側の「大東亜戦争」についての考え方を一般に紹介している。

「満洲国」建国一〇周年の祝賀や「第二建国」の呼びかけ、「民族協和」の声の高まりの中、古丁は長期戦を予測し、「第一建國から第二建國へ」（一九四二年三月）を執筆する。「満人」全体に向け、傍観的な態度を反省し、積極的に仕事に取り組み、日本人に対し腹蔵なく発言しよう、などと呼びかけた。その内容は、政府に対し、「満人」の発言権と参政権、そして、対等な「民族協和」実現の要求を突き付けるものだった。

古丁はまた、三度にわたって大東亜文学者大会に参加している。国策通りに「日本は太陽」など各種の発言を行いながら、第二回大会（一九四八年八月）では、国立編訳館の設立を提案し、対等な関係の実現を要求した。これは「大東亜共栄圏」構想に沿ったもので、「民族協和」を進めようとする勢力のバックアップにより、大会決議として採択された。

日本の敗色が濃くなるにしたがい、古丁の「満洲国」政府への協力は、より積極さを増すように見える。が、同時に、政府に対する批判も強め、戦後に備えた満洲自力建設への確たる意向を見せている。

「新生」（一九四四年二月）では、民族の垣根を越えて「共通の敵」と戦う姿勢を示しながら、現実の不平等な民族関係を告発した。「下郷」（一九四四年九月）では、「勤労増産」体制の視察に赴く協和会代表である「私」の目を通して、集団出荷に励む農民たちの姿を明るく描きながらも、農民の具体的な個々の要求に応えられない官吏の姿勢を密かに風刺している。また、汪精衛南京政府の勢力圏にあった上海の雑誌『文友』に発表した「山海外経」（一九四五年七月）では、「米英撃滅」をテーマに寓話的風刺画を描いているが、その内実は帝国主義による搾取への批判に終始している。これは「大東亜共栄圏」構想を西洋帝国主義批判として掲げる日本文化人たちのやり方を借用したと言えるだろう。つまり、日本帝国主義に対する批判につなげる戦略である。

その他、「注音の問題」（聯盟『藝文志』第五期）では、「満洲国」の漢語注音符号の禁止を批判した。「民族協和」のスローガンを利用して漢話を守り、批判し返すやり方である。さらに古丁は、聯盟『藝文志』を通して、自民族の民度を高めるための様々な提言を行うと共に、文学の面白さを強調した。

エッセイ「青年の責任」には、「勤労増産」のスローガンを借りて、「康徳文化」の特徴の一つを青年の技術練成とし、日本人から技術をいただこうとする「民族協和」の考え方が見られる。そこには、日本が引き上げた後、近代的な施設や工業設備を「そっくりそのまま頂戴」し、管理運営しようという狙いがあったと考え

られる。熱河訪問記「西南雑感」（一九四四年七月）では、熱河地帯をいずれダムと工場地帯に変える夢を語り、軍隊における漢民族系と朝鮮系との「民族協和」の実態も紹介している。

以上、「満洲国」時代の古丁は、自身の苦悶の昇華として文学活動を開始し、新文学の建設のために旧文芸と闘い、また「郷土文芸」派との論争も行った。作家と読者の関係を考え直し、文化レベルの低い大衆にとって読みやすく親しまれる文学へという変化も見られる一方で、一貫して変わらない根本的な立場も保持していた。それは次の三点にまとめられよう。

①「民族協和」のスローガンを利用して、漢語文学を守り、また、漢語の注音符号廃止から禁止へと展開した「満洲国」の国語政策を批判したこと。これは、「大中国」への帰属意識に支えられたものと言ってよい。

②漢語文学の表現を豊かにするために、夏目漱石『こゝろ』の翻訳にあたって大胆とも思われるような実験をした他、西欧文学の翻訳にも社会批判のみならず、寓話的な手法を見せ、さらに自作においても様々な文学的技法の開発に努めたこと。

③知識人の苦悶と堕落、没落していく農村と流転した農民の荒んだ生活、礼教に抑圧され犠牲となった女性、「味を失った塩」となった人びとなどを描き、「満洲国」社会に残存し、儒教復活によってかえって助長された「封建」制、左翼への厳しい取締り、植民地統治の政策や制度などへの批判を行ったこと。これらは魯迅に学んだ精神で、「文学の使命」を読者の改造におき、現実社会への批判と、漢語と文学改良に努めるものであった。

古丁は、日中戦争の開始以降、とりわけ日本対米英戦争の長期化に対し覚悟を固めた際には、厳しい検閲に引っかかりそうな表現は極力避け、日本の神道崇拝に賛同するような態度さえ見せている。協力か抵抗か、と考えるなら、協力しつつ抵抗し、抵抗しつつ協力したことになる。日本人が実権を握る「満洲国」政府に対して、彼は自分の考えを貫くために、時に小手先の技術も用い、「面従腹背」の態度を取ることもあった。だが、それに終始したわけではない。古丁の態度は、表面のみ従い、裏で反抗するのとは根本的に異なる。本心を隠して相手のスローガンに乗りつつ、それを利用するというのとも違っていた。

古丁は、「満洲国」のスローガンである「民族協和」に関して、その通り実現されるべきだと本心から考えていた。それゆえ、それが対等に実現されていない現実に対しては、鋭く正面から批判する態度を一貫して保つことができたのである。米英帝国主義に対する「大東亜共栄圏」構想についても、本当にスローガン通りに実現されるなら、それは「良いことだ」と思っていたと考えられる。なぜなら、そのスローガン通りに運ぶなら、日本は帝国主義を捨て、中国から出て行くはずだからである。そうなれば、古

丁の抱き続けた「大中国」の夢が実現し、侵略者の残したものを「そっくり頂戴する」ことができる。古丁の芯の強さは、そのような思想に支えられていたのである。その意味で、彼は独自のやり方で「抗日愛国」を貫いたと言えるだろう。

五．今後の課題と展望

一人の人物を歴史的環境の中に置き、その行動と思想について考察する。それによって、その実体に最も近い人物像が現われる。そのためには、現地踏査や当事者インタビューの他、徹底的な資料調査が有効な方法だということが確認された。今後もこのような方法で研究に取り組んでゆきたいと考えている。「満洲国」文化の特徴とその全体像を解明する上で、個々の具体的な研究をさらに進めて行かなければならない。古丁ら作家たちの戦後の動向の調査研究も今後の課題として残されている。

同時に、「満洲国」の翻訳・創作・出版の全体像を明らかにする作業を引き続き行わなければならない。本書の第二部で古丁の翻訳活動の実態を明らかにしたが、「芸文志派」および他の翻訳作品の解明が残っている。『大同報』や雑誌『作風』に掲載された作品を含めて、満洲で翻訳された日本語作品の傾向や、それらが満洲文壇に与えた影響、また、同時期に中華民国で翻訳された日本語作品との比較などの調査が必要である。特に、中華民国と比較した場合、日本支配下における「満洲国」の日本文学受容の特徴が現れてくると思われる。また、長谷川濬によるロシア語から日本語への翻訳、大内隆雄などによる漢語から日本語への翻訳も大きな課題として残されている。

本書の第三部では古丁の創作の全容を明らかにし、「芸文志派」の創作にも多少触れたが、古丁の作品には、島崎藤村の「新生」、志賀直哉の「暗夜行路」など、日本の文学作品から題名を借用する例が少なくなかった。もともと日本のプロレタリア文学の翻訳から出発した作家であり、「転向小説」や「私小説」への関心も高かったと思われる。同時代の日本文学からの影響をさらに考察することも大きな課題の一つである。

なお、小松・疑遅・爵青・王秋蛍らの作品の調査とその全容の解明、そして、思想的傾向の分析はまだ行っていない。「満洲国」の「満人」作品と在満日本人作家の作品の比較、ならびに交流の実態もまだまだ調べ尽くしていない。また、中華民国文学、延安文学との関係も明らかになっていない。

『明明』と芸文志事務会、芸文書房については、かなり明らかになってきているが、「満洲国」の出版の全体像を把握するには至っていない。政府系の出版社と民間出版社はいずれも雑誌と書籍を出版していたが、それぞれどのような性格を持っていたか、まだ

調査されていない面が多い。新聞掲載の作品も手付かずである。

「満洲国」には、朝鮮語やロシア語などの出版物もあった。それぞれの性格とその相関関係も解明されるべきであろう。様々な言語の新聞相互の関係に踏み込んだ研究はまだない。

本書では、「満洲国」時代における古丁の思想の変遷を問題にした。そのため、戦後については、よく検討していない。しかし、古丁およびその時代の知識人の近代史を書くためには、戦後の研究は避けられない。満洲の場合、一九四五年のソ連軍の侵入から、その後の共産党軍と国民党軍交替時の情況、一九四九年の中華人民共和国成立初期、右派闘争時期、文化大革命期間中の扱い、そして、一九七九年の名誉回復まで、その歴史的な流れの中の近代知識人の浮沈を検討すべきことは言うまでもない。以上を、今後の課題として記しておく。

引用文献一覧

『こゝろ』夏目漱石著、岩波書店、一九一四年
『満洲国官吏録』国務院総務庁人事処編纂、一九三五、一九三九年
『モーパッサン短編集　頸飾外七編』モーパッサン著・前田晁訳、岩波書店、一九三六年
『大魯迅全集』第四巻、改造社、一九三七年
『一知半解』古丁著、月刊満洲社、一九三八年
『奮飛』古丁著、月刊満洲社、一九三八年
『火光』百霊著、月刊滿洲社、一九三八年
『浮沈』古丁著、満日文化協会・詩歌叢刊刊行会、一九三九年
『心』夏目漱石著・古丁訳、満日文化協会、一九三九年
『新京案内』永見文太郎編、新京案内社、一九三九年
『平沙』古丁著・大内隆雄訳、中央公論社、一九四〇年
『平沙』古丁著、満日文化協会、一九四〇年
『若き英雄トルディ』ヤノシュ・アラン著・メッケル訳、第一書房、一九四〇年
『満洲新文学史料』王秋蛍編、出版元不明、一九四〇年
『学窓と社会』中島健蔵著・古丁訳、芸文書房、一九四一年
『譯叢』芸文書房、一九四一年一〇月
『満洲藝文年鑑』満洲芸文聯盟、満洲冨山房、一九四二年
『譚』古丁著、芸文書房、一九四二年
『米英東亜侵略史』大川周明著、第一書房、一九四二年
『文学と大陸』浅見淵著、図書研究社、一九四二年
『竹林』古丁著、芸文書房、一九四三年
『満洲作家論集』陳因編、実業印書館、一九四三年
『満洲文學二十年・序』大内隆雄著、国民画報社、一九四四年
『草梗集』辛嘉著、興亜雑誌社、一九四四年
『櫻園』杜白雨著、興亜雑誌社、一九四四年
『高村光太郎全集』第三巻、筑摩書房、一九五八年
『北辺慕情記』北村謙次郎著、大学書房、一九六〇年
『漱石全集第一巻　吾輩は猫である　六』岩波書店、一九六五年
『漱石全集第二巻　短篇小説集』岩波書店、一九六五年
『魯迅全集』第四巻、人民文学出版社、一九七三年
『筑摩世界文學大系31・ゴーゴリ／レーモントフ』筑摩書房、一九七三年
『旧植民地文学の研究』尾崎秀樹著、勁草書房、一九七一年
『宮本武蔵』（『吉川英治全集』15）吉川英治著、講談社、一九八〇年
『八十路―杉村勇造遺稿集―』杉村棟編、文化印刷株式会社、一九八〇年

『左聯回憶録・上下』『左聯回憶録』編輯組編、中国社会科学院文学研究所、一九八二年
『日本プロレタリア文学集　文芸戦線作家集（一）』新日本出版社、一九八五年
『武者小路実篤全集』第一〇巻、小学館、一九八九年
『二心集』『魯迅全集』第六巻、竹内実・吉田富夫訳、学習研究社、一九八九年
『偽満文化』孫邦等編、吉林人民出版社、一九九三年
『没法子北京』東野大八著、蝸牛社、一九九四年
『「明明」の思い出』（回憶《明明》）劉遅（疑遅）著、手稿、一九九五年
『古丁作品選』李春燕編、春風文芸出版社、一九九五年
『帝国日本の言語編成』安田敏朗、真珠社、一九九七年
『梁山丁研究資料』遼寧人民出版社、一九九八年
『文学にみる『満洲国』の位相』岡田英樹著、研文出版、二〇〇〇年
『周作人と日本近代文学』于耀明著、翰林書房、二〇〇一年
『旧「満州」文学関係資料集』（一・二）大村益夫・布袋敏博編、二〇〇〇、二〇〇一年
『満洲国の文化―中国東北のひとつの時代』西原和海・川俣優編、せらび書房、二〇〇五年
『日本の文化ナショナリズム』鈴木貞美著、平凡社新書、二〇〇五年
『紅い花・夢がたり』ガルシン著・神西清訳、岩波書店、一九三七年第一刷発行、二〇〇六年改版第一刷発行
『生命感の探究―重層する危機のなかで』鈴木貞美著、作品社、二〇〇七年

その他参考文献

『満洲國と協和會』満洲国協和会錦州弁事処、満洲評論社、一九三五年
『満洲文藝年鑑』Ⅰ　青木実編、G氏文学賞委員会、一九三七年、復刻版　西原和海解題、葦書房、一九九三年
『満洲藝文年鑑』Ⅱ　満蒙評論社、一九三八年、復刻版、同前
『満洲藝文年鑑』Ⅲ　満洲文話会、一九三九年、復刻版、同前
『大達茂雄』大達茂雄傳記刊行会、一九五六年
『転向記』三部、山田清三郎著、理論社、一九五七、一九五八年
『高村光太郎』吉本隆明著、春秋社、一九七一年
『満洲建国の夢と現実』国際善隣協会編、謙光社、一九七五年
『親日文学論』林鐘国著・大村益夫訳、高麗書林、一九七六年
『回想　古海忠之』古海忠之回想録刊行会、一九八四年

『蕭軍記念集』梁山丁編、春風文芸出版社、一九九〇年
『「昭和」文学史における「満洲」問題』第一～三、杉野要吉編、早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、一九九二年
『帰朝者・荷風』劉建輝著、明治書院、一九九三年
『日本報国会―大東亜戦争下の文学者たち』櫻本富雄著、青木書店、一九九五年
『東北現代文学大系』第一四集　資料索引巻、瀋陽出版社、一九九六年
『満洲崩壊―「大東亜文学」と作家たち』川村湊著、文芸春秋、一九九七年
『日本の「文学」概念』鈴木貞美著、作品社、一九九八年
『中国淪陥区文学大系』広西教育出版社、一九九八年
『東北文学史論』李春燕編、吉林文史出版社、一九九八年
『爵青代表作』中国現代文学館編、華夏出版社、一九九八年
『魔都上海―日本知識人の「近代」体験』劉建輝著、講談社、二〇〇〇年
『越界与想像：二〇世紀中国、日本文学比較研究論集』王中忱著、中国社会科学院出版社、二〇〇一年
『二十世紀中国的日本翻訳文学史』王向遠著、東北師範大学出版社、二〇〇一年
『近代日本文化史七　総力戦下の知と制度』小森陽一他編、岩波書店、二〇〇二年
『近代日本と植民地七　文化の中の植民地』大江志乃夫他編、岩波書店、二〇〇五年
『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』細川周平著、みすず書房、二〇〇八年
『満洲―交錯する歴史』玉野井麻利子編・山本武利監訳、藤原書店、二〇〇八年
Norman Smith, *RESISTING MANCHOUKUO: Chinese Women Writers and the Japanese Occupation*, UBC Press, 2007.